ミンタラ

アイヌ語で「広場」の意味

文 北原モコットゥナシ・瀧口夕美　絵 小笠原小夜

「ポネオハウ」骨のスープ 具だくさん

イペアンロー！（いただきます）

そろそろ本格的な冬をむかえますね。今日は体がぽかぽかにあたたまる「ポネオハウ」、骨のスープをしょうかいします。

アイヌ料理の中心となるのが「オハウ」。魚や肉をにて、だしを取り、山菜やキノコ、ジャガイモやニンジンなどの根菜を入れてつくる、具だくさんの汁物です。最近では、サケでつくるチェㇷ゚オハウ（魚のオハウ）がよく知られています。

カムオハウ（肉のオハウ）には、キムンカムイ（クマ）、ユㇰ（シカ）をはじめ、モユㇰ（タヌキ）やイセポ（ウサギ）などの動物、エソㇰソキ（アカゲラ）などの鳥の肉も使いました。

明治時代には、北海道でもブタを育てるようになりました。ぶた肉料理が一般的になるにつれ、ぶたのポネオハウもつくられるようになったと言われます。とくに十勝地方で広く親しまれました。十勝生まれの私（瀧口）の母も、ポネオハウの味がなつかしいのか、時々つくってくれました。

朝から夕方までかけて骨をにこんだスープは、とんこつラーメンのような白い色ではなく、透明です。骨の「ずい」から出るだしはコクがあって、とてもおいしい。根菜を入れてさらににて、塩で味付けしたら、ポネオハウのできあがり。

うどんを入れたり、ラーメンを入れたりもします。スープから取り出してどんぶりに積み上げた骨から、肉をはがして食べるのも楽しみでした。

カンピソシ(本) 人物伝

わたしのコタン

弟子　シギ子著

小さいころをたびたび思い出し、なみだぐむくらいなら、書いてみたらどうだろう―。この本は、1931年（昭和６年）に道東の弟子屈町の屈斜路コタン（村）で生まれた女性が、思い出を書いたものです。

５歳くらいのころのこと、村のはずれでドォーン、ドォーンと音がして、少女はフチ（おばあさん）にしがみつきました。それは、山でクマがとれたことを知らせる鉄砲の合図でした。

村人が集まり、かりからもどった人たちを出迎えました。だれからともなく手をたたき、「オノノー、オノノノノー（よかった）」と歌い、おどり始めます。なみだを流している人もいます。まねしておどると、となりにいたフチがなみだをふきながら頭をなでてくれました。著者は、このときのイオマンテ（クマのカムイをもとの世界に送り返す儀式）が忘れられません。

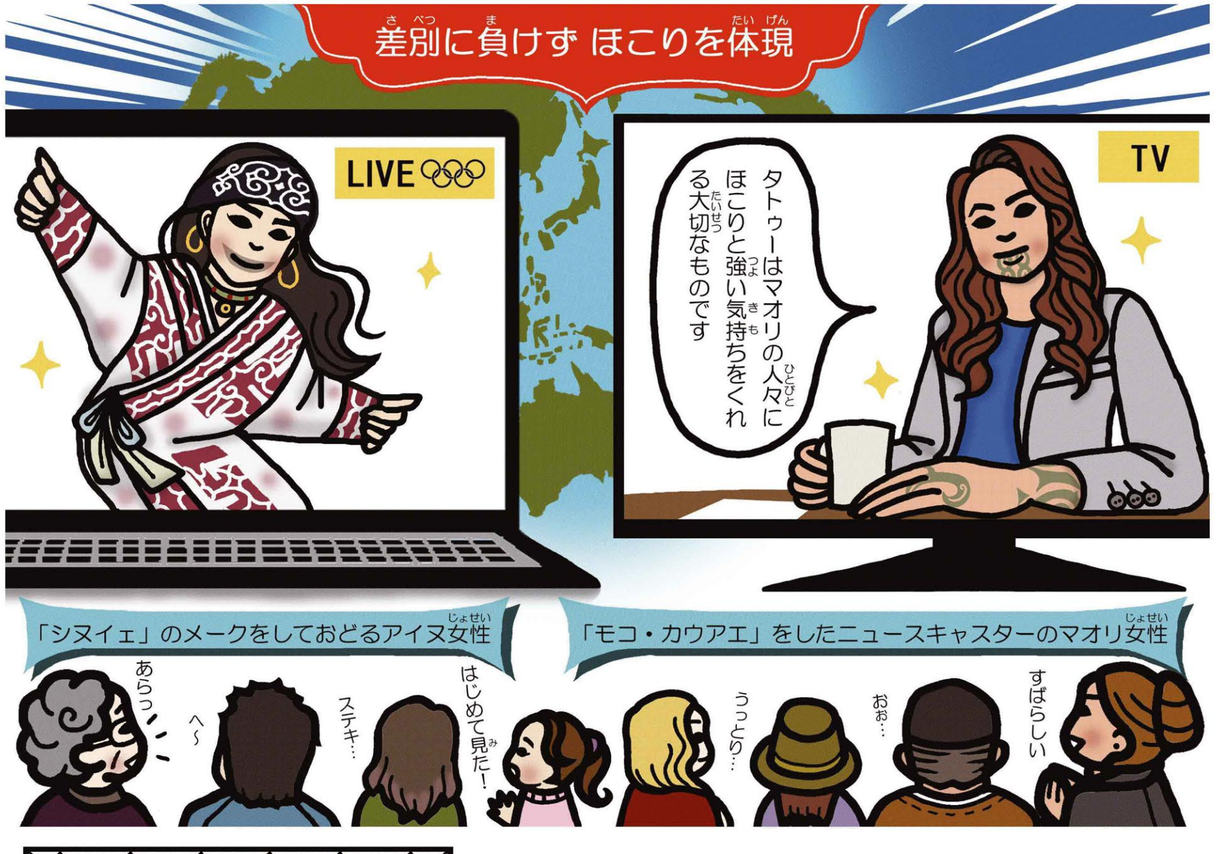
屈斜路湖では、毎年10月の終わりにハクチョウが飛んできます。その少しあと、湖がこおり始めます。吹雪の前にはハクチョウたちが必ずさわぎだし、それを合図に、村の人は吹雪の間、外に出られなくてもいいように準備します。吹雪がやむと、子どもたちはスキーやソリをしたり、かまくらをつくったりします。

４月、湖の氷がとけ始め、５月中ごろには、くずれた氷が川へ流れ出ていきます。大人たちは、山菜採りや湖でのウグイとりにいそがしくなります。夏、子どもたちは湖にもぐり、水の中でにらめっこをして遊びます。秋、畑の収穫が終わるころには、となりの美幌町のコタンからおじさんが新米を背負って遊びに来て、夜にはサコロペ（英雄物語）をしてくれます。

長年、アイヌ文化を伝えてきた著者の弟子シギ子さんは、今年91歳。大人になり、記録のために行ったイオマンテでは、なみだを流して歌い、おどることはできなかった、と書きます。シギ子さんの心に残るコタンの暮らしを読むと、そうした暮らしの中にあってこそのイオマンテなのだと感じます。

（2001年　私家版）

差別に負けず ほこりを体現



ニュースフムフム

「フムフム」はアイヌ語でのあいづち

タトゥーの文化 民族のプライド表す

北海道から南へ飛行機で12時間ほど飛ぶと、「アオテアロア」があります。アオテアロアはニュージーランドのこと。先住民族マオリによる呼び名です。アオテアロアのアナウンサー、オリーニ・カイパラさんが話題を集めています。

オリーニさんはマオリの女性です。アナウンサーとして初めて、くちびるとあごに伝統のタトゥー（入れずみ）を入れ、人気番組のキャスターにもなりました。一部の人は、タトゥーを「悪趣味」「こうげき的」と非難しました。これに対し、オリーニさんは、タトゥーはマオリの人々にほこりと強い気持ちをくれる大切なものだ、ときっぱりと答えました。カッコいい。

マオリ文化の中のタトゥーの意味を、マオリ男性であるコッター・マシューさん（北星学園短大准教授）に聞きました。「女性が口のまわりに入れるタトゥーはモコ・カウアエといい、入れる人が増えています。日本に住んでいる私の友達も入れています。タトゥーは男性も入れます。男性の場合は顔全体や体に入れることもあります。マオリのプライドを表すものです」

アイヌ民族の女性も、口のまわりに「シヌイェ」と呼ばれるタトゥーを入れる伝統がありました。アオテアロアでも北海道でも、その土地に後から移り住んだ人々によって、先住民族とその文化が否定されてきました。タトゥーも「みにくい」「こわい」と差別され、禁止されました。

アオテアロアでは数十年前から、マオリの若い人がタトゥーを入れるようになり、若いときには入れられなかった年配の人も入れるようになったそうです。それは差別に負けない気持ちを示す、とても勇気のいることです。オリーニさんはその勇気をテレビで示したのでした。

アイヌ女性にも、メークなどでシヌイェをする人が増えています。昨年の東京オリンピックの式典でも、シヌイェのメークをしておどる様子がインターネットで世界に発信されました。

きょうのことば

●先住民族マオリ

アオテアロアの先住民族マオリは、豊かな文化を持っています。私（北原）は、美しい彫刻の大ファン。船や家や、いろいろな場所にかざられた彫刻は見事のひとことです。

「ハカ」という勇ましいおどりも知られています。いろいろな国に、移住したマオリの人がくらしていて、日本でもラグビー選手として活躍している人がいます。

マオリ語の復興の活動も盛んです。色付きの棒を使って、マオリ語でマオリ語をおぼえ、マオリ語だけで話す「テ・アタアランギ」という学習法が日本にしょうかいされ、アイヌ語の学習に取り入れられています。マオリ語のテレビ放送もあり、オリーニさんは英語のほか、マオリ語でも番組を担当しています。

●タトゥー

タトゥーは、はだの下にすみなどで色を着ける装飾です。日本の周辺でも、南はアオテアロアなどの太平洋地域から台湾、琉球諸島（沖縄）、北はロシアのカムチャツカ半島あたりまで、タトゥーの文化があります。

日本の本州でも、弥生時代のころまではタトゥーをしていたそうです。その後、入れる人がいなくなり、江戸時代になると大きく、はなやかなタトゥーが流行しました。しかし、次第にこわい人が入れるものだと考えられるようになりました。

2013年、マオリ語の学習法を伝えに来たマオリ女性が、顔のタトゥーを理由に入浴施設の利用を断られるという残念なできごとがありました。おたがいの文化を尊重してくらすためには、文化の歴史を知ることが大切です。